

マイクロスコープ視野下における垂直歯根破折歯の新規保存療法

～根管長測定連動超音波装置による SCOOPING OUT TECHNIQUE
とマルチファイバーポストコア・テクニック～

八ヶ岳歯科 天川 丹



Sjögren は歯内療法が奏功せずに抜歯に至った原因として、歯根破折が 31%、齲蝕 16%、歯周疾患 15%、および穿孔 4%であることを示し、抜歯原因の第 1 位が歯根破折であることを報告した。歯根破折歯の中でも特に垂直歯根破折歯（以下 VRF）は歯内療法を行うのが困難でほとんどの症例が抜歯対象と考えられている。

演者は、開業以来予防歯科をはじめとする包括歯科診療を実践してきて、自分自身の研鑽では及ばない難題が VRF であった。開業して 10 数年を経過したころから、過去に自分自身で歯内療法を行った症例が VRF を来とし、抜歯に至る経験をした。VRF 症例に対する治療法を模索する中、2006 年春に根管長測定器を併用した根管内歯根接着法を考案し、それ以来約 200 症例に臨床応用を行い良好な成績を得た。

現在 VRF の 保存療法は口腔外歯根接着再植法と、根管内歯根接着法に大別される。根管内歯根接着法は口腔外歯根接着再植法と比較して抜歯にともなう歯根膜障害が無いこと、および咬合による即時負荷が可能で補綴処置への移行が迅速であるが、歯根破折部位周囲の感染歯質除去が困難であり、マイクロスコープによる拡大視野下での処置が必要とされる。直視下では困難な根管内歯根接着法は、マイクロクラックを含むすべての歯根破折部位周囲（破折隙及び破折線）の感染歯質除去と内部接着を確実にできるか否かによって臨床成績が大きく左右される。演者は臨床成績の向上を目的として、マイクロスコープ視野下で根管長測定器を併用し、scooping out technique による感染歯質除去と複数のファイバーポストを使用した根管内歯根接着法を実践してきた。本講演では、これらの理論/術式と臨床症例を提示することによって、従来抜歯対象であった VRF の新規保存療法としての可能性を提案する。